

① 好古堂・御細工所

イーグレひめじの周辺は池田時代から武家地として使用されていたが、17世紀中頃の第1次榊原時代の絵図には街路北東隅に「会所」の表記があり、公的施設の敷地に転用がされていく。18世紀中頃の酒井時代になると、前任地の前橋から移転した藩校「好古堂」が置かれた。好古堂は文化13年(1816)に大手前に移され、天保13年(1842)頃には現在の好古園へ拡張移転が行われたとされる。好古堂移転後も絵図には「御金蔵」「御細工所」等の記載が見られ、幕末まで公的施設の敷地として使用されたことがわかる。

平成8～10年(1996～98)にイーグレひめじ建設に先立つ発掘調査では、井戸や屋敷割の溝、建物の建替えに伴うものと考えられる大型の廃棄土坑などが確認されている。また、東山焼製品がまとまって出土していることも注目される。

② 中堀

※現在、発掘された遺構の見学はできません。

中曲輪と外曲輪を区画する中堀の総延長は約4.3km。西部から北部、東部にかけての堀が整備され、往時の姿をとどめるのに対し、南部中堀は明治45年(1912)から大正2年(1913)にかけて惣社門から鷗門まで、大正14年(1925)と昭和2年(1927)に惣社門から内京口門までの埋め立てが行われた。その後、昭和7年(1932)に鷗門から埋門までが埋め立てられ、その上に国道2号が開通して現在に至っている。国道の北側には埋門、鷗門、中ノ門、惣社門の石垣と土塁が残る。令和2年(2020)に行われた第442・445次調査では、中堀南面の石垣を検出した。第442次調査で検出した石垣は、場所によって積み方が異なっていた。また、第445次調査では石垣中央部で屈曲が見られ、石垣の東西で積み方の様相が異なっていた。いずれも積み直しの痕跡が見られ、石垣の崩落に伴い、度重なる改修を受けていることを示している。



姫路城城下町

姫路は古代には国府があり、中世にも守護屋敷などが置かれていた。江戸時代の城と城下町は、関ヶ原合戦の戦功により播磨に封じられた池田輝政による慶長6年(1601)からの築造によりほぼ完成した。

姫路城は姫山と鷲山にわたって築かれた平山城で、山麓を内堀で囲む。その周囲の城下町を中堀と外堀で囲む総構を形成していた。中堀内は上・中級武家屋敷や播磨国総社とし、外堀内は下級武家屋敷や寺町のほか街道に沿って町屋を設けていた。

③ 切手会所跡・国産木綿会所跡

—きってかいしょあと—
—こくさんもめんかいしょあと—

姫路藩家老河合道臣(寸翁)が藩財政再建のために始めた、木綿専売政策の拠点。道臣は、文政4年(1821)に設置した国産木綿会所において、姫路藩領の木綿を切手会所で発行する藩札と引き換えに買い占め、その木綿を江戸に直接輸送して販売する江戸直積(ちよくづみ)と言われる方法で莫大な利益を得た。

姫路藩の藩札は、道臣の木綿専売政策の好調を背景に、播磨一帯で信用を得て、広く通用した。



木綿切手

④ 札辻

—さつにつじ—

中ノ門に通じる南北街路と西国街道の交差点で、南東隅には高札場が設けられたために札辻と呼ばれた。高札場は町の中心部に設けられることが多く、『お夏清十郎』の舞台米問屋(但馬屋)の推定地もこの近辺である。高札場には、キリシタン禁令といった幕府の基本法令とともに、その都度触書が掲げられて、往来する町民に法令の周知が図られていた。

この札辻一帯は、姫路町政の中心地でもある。藩の意向を受けつつ、姫路町の自治を担った大年寄の那波家(なばけ)、椀箱屋(わんばこや)三木家、国府寺家(こうでらけ)の三家跡や、大年寄のもとで各町の町年寄らが町政の実務を執った年行事跡も近隣にある。

さらに那波家、椀箱屋、国府寺家は、参勤交代等で姫路町を往来する大名の宿泊所(本陣)も担った。『大日本沿海輿地全図』を製作した伊能忠敬も、播磨測量の折に三木家に宿泊している。

⑤ 伊勢屋跡

伊勢屋本店は元禄15年(1702)に創業した菓子屋で、酒井忠学と11代將軍徳川家斉の娘・喜代姫との婚礼時に河合道臣(寸翁)の命で「玉椿」を創出したと伝わる。令和2年(2020)に札辻北西で実施した第437次調査では商家に伴う遺構と共に「いせや」「角いせや」などと記された焼継ぎされた陶磁器が出土した。



表紙の城下町絵図(「播州姫路御城図」元禄8年(1695))と木綿切手は姫路市立城郭研究室所蔵。『幾藏図冊』(姫路市立城内図書館所蔵)から、埋門、鷗門、中ノ門、惣社門、鳥居先門の絵図を一部加工。その他の発掘状況などの写真は姫路市埋蔵文化財センター所蔵である。

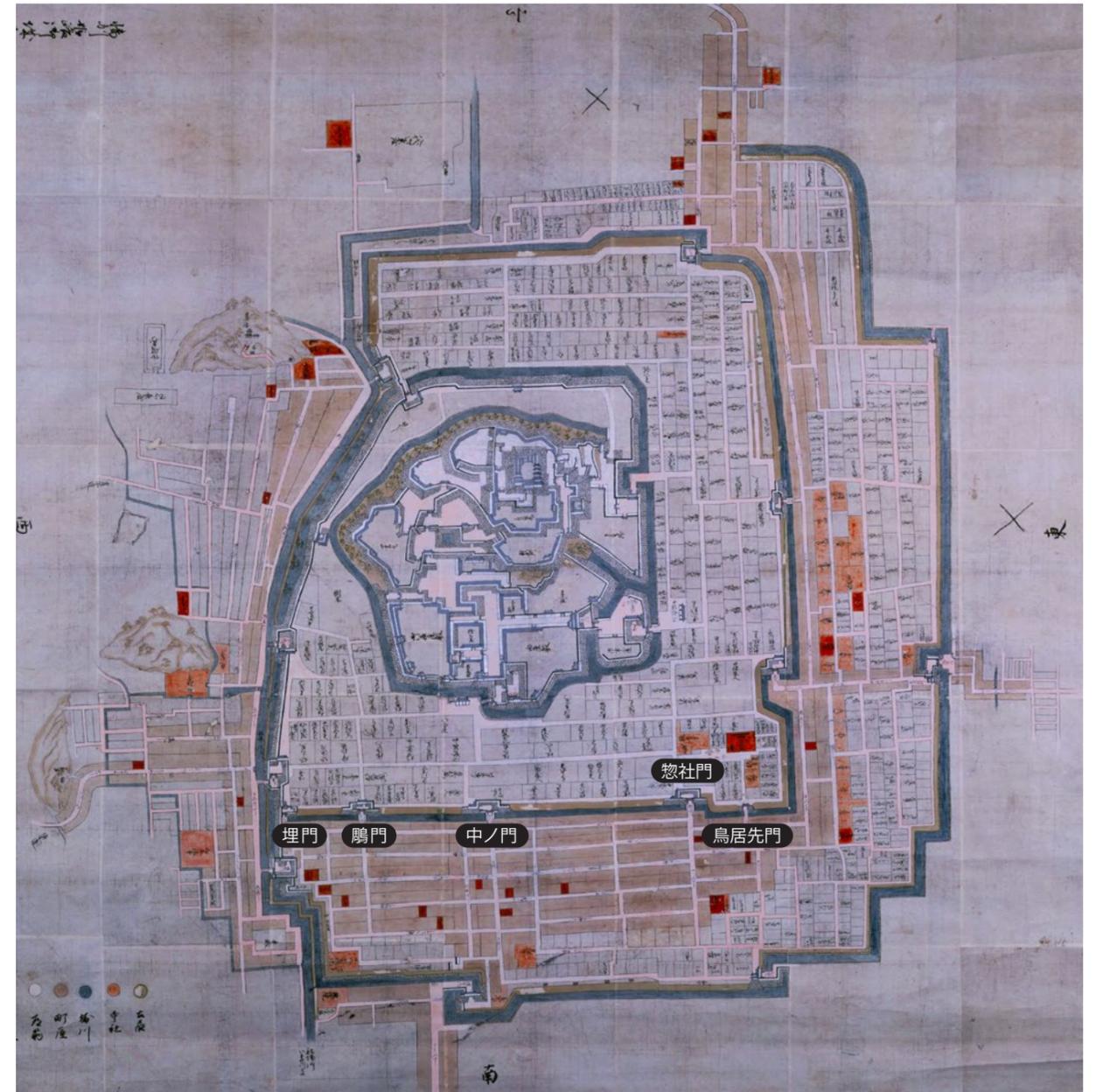
姫路市埋蔵文化財センター

Himeji City Archaeological Research Center
〒671-0246
兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079)252-3950
FAX (079)252-3952
URL <http://www.city.himeji.lg.jp/maibun-center/>
令和5年(2023年)11月11日発行

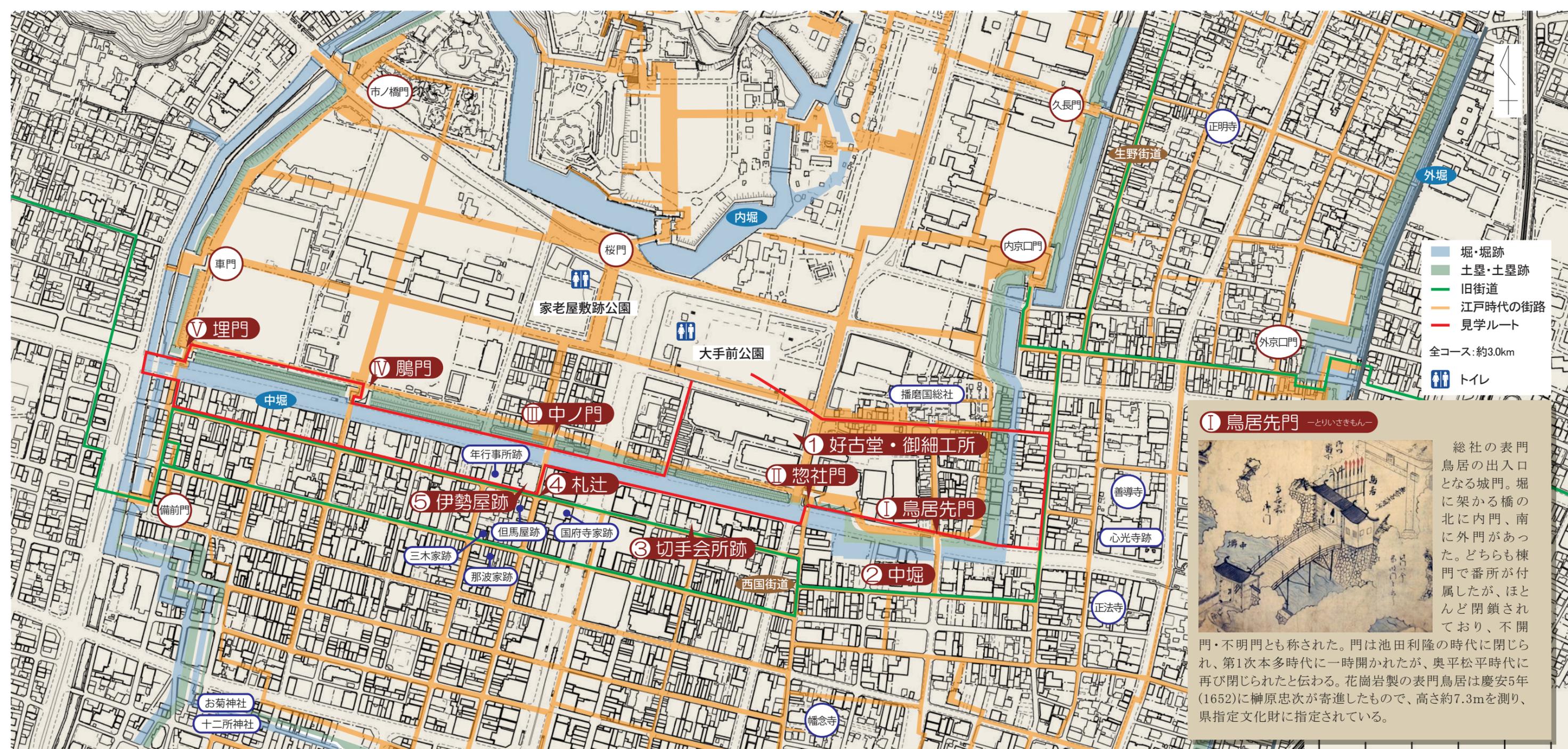
姫路市立城郭研究室

〒670-0012
兵庫県姫路市本町68-258 日本城郭研究センター内
TEL (079)289-4877
FAX (079)289-4890
URL <http://www.city.himeji.lg.jp/jyokakuen>

姫路城城下町を巡る (南部中堀)



「播州姫路御城図」元禄8年(1695)



I 鳥居先門 —とりいさきもん—



総社の表門鳥居の出入口となる城門。堀に架かる橋の北に内門、南に外門があった。どちらも棟門で番所が付属したが、ほとんど閉鎖されており、不開門・不明門とも称された。門は池田利隆の時代に閉じられ、第1次本多時代に一時開かれたが、奥平松平時代に再び閉じられたと伝わる。花崗岩製の表門鳥居は慶安5年(1652)に榊原忠次が寄進したもので、高さ約7.3mを測り、県指定文化財に指定されている。

V 埋門 —うずめもん—



姫路城中曲輪の南西隅、中堀と外堀の分岐点に位置する。内門は櫓門に準じる形式で、西側に二階櫓が付属する。外門は高麗門に準じ、枡形虎口を形成する。門は池田時代の絵図には記載がなく、17世紀半ば以降の第1次榊原時代の絵図が初出である。発掘調査では内門の前で古い様相の石垣が見つかっており、門は第1次本多時代以降に整備された可能性がある。門は堀の合流部に位置し、敵の侵入を土橋で防ぐためとも考えられる。

IV 鷗門 —くまたかもん—



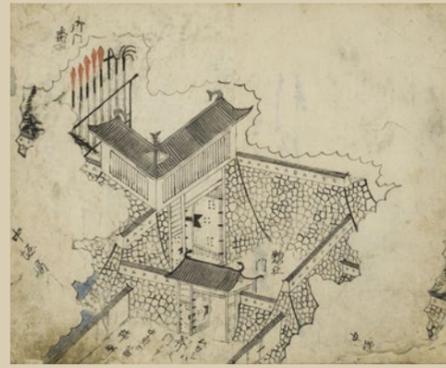
南部中堀の西部に位置する。鷗(くまたか)はタカ科の鳥で熊鷹・角鷹ともいい、古くから鷹狩に用いられるが、門の名称の由来は明らかではない。内門は櫓門、外門が高麗門で、どちらも南向きに開口し、枡形虎口を形成する。内門の内側に番所が存在した。姫路市では昭和63年度に高石垣下部の発掘調査を、平成3年度に石垣修理と高石垣上面の発掘調査を実施し、土堀の基礎などを検出している。

III 中ノ門 —なかのもん—



南部中堀の中央に位置し、桜門につながる城下町のメインストリートに開く。17世紀半ば以降の第1次榊原時代の絵図では、大手門と記載されている。「大工幾蔵姫路城図」では「ムカシハ鉞之門ト申ス」「此中之門ハ往還ヨリ之大手前也」とある。内門は櫓門、外門は高麗門で、両門で枡形虎口を形成し、内門の西側には多門櫓が付属した。外門の外には出番所、内門の中には大番所が存在した。

II 惣社門 —そうじゃもん—



南部中堀の鳥居先門と中ノ門の間に位置する。その名の通り、播磨国総社の西門筋に開く。「大工幾蔵姫路城図」では「ムカシハ斧之門ト申ス」とある。現在、大手門北側にある斧の刻印がある石垣石材は元々この門のもので伝わる。内門は櫓門、外門が高麗門で、両門で枡形虎口を形成し、内門の西側には多門櫓が付属した。昭和59年度・平成7年度の発掘調査では、鍵型に折れる石垣と、その下を潜る暗渠(あんきょ)が検出された。